日本医史学雑誌第三十六巻第四号
平成二年十月三十日発行

医史学と私

土屋重朗

私が医史学に興味を持ち始めたのは新潟医科大学に在学中であった。その原因は二つあった。

一つは昭和十六年平沢興教授の解剖の授業を受けたことで、先生が系統解剖の授業を分担されたのは脳神経系・循環器系・感覚器系等であったと記憶しているが、先生はメモも何も持たず全くの素手で教室に現れ、ゆっくりと水の流れるような名調子で講義をされた。そのためノートは非常にとり易かったが、しばしノートをとるのも忘れて、うっとりと講義に聞き入ったことも何度かあった。一番印象に残っているのは講義に入る前に毎回きまって十五分か時には二十分位、東西古今の有名な解剖学者について一回一人に限って、その業績と人となりや逸話、特に学問に対する態度などを語ってくれた。これが私に研究の面白さを知らず知らずのうちに教えてくれた。さらに当時ははっきりと意識した訳ではないが、医史学に対する興味を植えつけられたように思う。その平沢先生が京都大学へ転任されたのは、私が卒業後軍医として従軍中だった。

もう一つの原因は山崎佐先生の講義であった。当時新潟医大には医事法制の専任教官が居らず、東京から山崎先生が来新されて何日かまとめて集中講義をして帰京された。ところが、先生が医事法制について講義するのは授業時間二時間のうちその半分にも満たず、あとの時間は日本の医史について話をされた。医事法制は試験がないので、多くの学友はあまり真面目に聴いていなかったが、私は先生が医史学の大家であることを知っていたので、熱心に講義を聴き、次第に講義

に引きこまれた。先生は能弁であったが、口が悪く、思っていることを遠慮なくしゃべり、大学や学生をこきおろしたりしたので、あまり評判がよくなかった。しかし折角新潟に滞在している間に、この高名な医史学者の話をもっと聴こうと数人の友達と謀って、「医史学懇話会」という会をつくって、膝を交えてさらに詳しく医史学の話を伺った。しかし先生が帰京されると、指導者がいないためと他の授業やポリクリなどに忙しく、自然とこの会も消滅してしまった。

昭和二十年の後半から三十年の前半ごろは清水近辺の郷土史に興味を持った。その頃まだ商船大学が清水にあり、日本史の田中教授が中心になって、特に近代を中心に史跡調査や古文書の手ほどきなどを受けた。その後商船大学は東京に再び移転したので、郷土史の会合もいつの間にか自然に解散し、私も医業や医師会の仕事が忙しくなり、しばらく歴史から遠去かっていた。

そのうち、どうせ郷土史を調査研究するなら医史をやろう。そして範囲も静岡県（駿・遠・豆）にまで拡げようと思いたった。

しかし医史を本格的に調査研究するには、その方法や手掛りがなくてはならない。県内で誰か医史を研究している人がいないか調べてみたが、当時は一人もいなかった。したがって医師が書いた論文やその他の文献は皆無といってよかった。

どこから手をつけてよいか迷ったあげく、新潟医大で弟の同級生であった蒲原宏先生がいろいろの雑誌などに医史を発表しているのを知って、先生に手紙を出し医史調査研究の方法等を伺った。先生は非常に詳しい返事を下され、多くのヒントを与えてくれた。先生からの手紙は私の医史学への興味や関心をかき立てた。

この頃から土曜の午後と日曜日はきまって県立中央図書館に通い、郷土資料の中から医史に関する文献類を探し出して読みはじめ、文献抄録や索引を作った。

昭和三十四年日本医史学会にも入会し、学会にはつとめて出席して会員の研究発表を聴き『医史学雑誌』にも目を通しているうちに、医史学の研究方法、特に地方医史の研究方法が分ってきた。

県医史を調べているうちに、私が最初に関心を持ったのは明治初期の県の病院史であった。静岡県の明治史は他県と違って大変ユニークなところがある。まず新政府成立とともに県下に存在した七藩はすべて房総へ国替えさせられて、駿河と遠江はまとめて七十万石旧幕徳川宗家に与えられた。今まで大将軍であった徳川はわずか七才の亀之助（のち家達）を藩主として駿府に移住を命ぜられ、間もなく謹慎中の慶喜も水戸より駿府に到着した。これと前後して旧幕臣たちが陸路と海路で駿河に移住した。没落した徳川家はこれら大量の旧幕臣を養う余裕はなく、多くは無禄移住の徒で、その生活はまことに悲惨であった。しかし一面では当代一流の学者や文化人も移住して来たので、一時は江戸の文化の華が駿遠で咲いた感があった。この時幕府関係の漢洋医師たちも来駿したが、洋医たちは藩の命で明治二年二月駿府と沼津に病院を創設し、翌年掛川にも小病院を建てた。まずこれらの病院について調べているうち明治中期までの病院に大いに興味を持ち、いろいろと文献資料を漁ってみた。その中でも大変役に立ったのが、『静岡県議会史 巻一』に収載されている議事梗概で、ほぼ議事速記録に近いもので、これを通読して病院の概要や変遷を知ることができた。また『関口元老院議員巡視記録』などからも新事実を知ることができた。こうして明治二十二、三年ごろまでの病院の内容や変遷をまとめて、『日本医事新報』の昭和三十七年十一月三日号から同年十二月八日号まで、六回に分けて「明治初期の静岡県の病院」と題して連載した。これが私の医史学での処女作ともいえる。

その後大阪での医学総会の折、緒方洪庵展が開かれ『適々斉塾姓名録』を手に入れ、静岡県（駿・遠・豆）出身の塾生の氏名が分ったので、その人達の経歴を調べることを当面の目的とした。実際に調べてみるとその半分位しか判明しなかった。また他の蘭学塾の本県出身者の氏名を調べ、その経歴などを調査したが、やはり判明しない者が多かった。

明治二年に設立された駿府（のち静岡）と沼津病院の医師たちはいずれも蘭方医でその経歴などはほとんどが分った。いずれの医師たちの経歴にも大いに興味を持ったが、短い期間だけ静岡、沼津にいた医師が多い。その中で駿府病院二等御医師柏原学而は慶喜の侍医として駿府に随従し、病院廃止後も静岡にとどまり慶喜の側を離れず静岡で一生を終えた。学而は緒方洪庵門下で適塾に足掛け九年もいて塾頭をもつとめた。その生涯に非常に興味を持ったので、子孫の柏原長弘先生（大阪）に学而の系譜や経歴や人となりなどを手紙で何度も伺い、また学而の弟子山田種一氏の息に当る山田学先生から非売品の著書をお借りしたり、その他静岡での事は自分で調べて、遂に昭和四十六年「柏原学而伝」を完成させた。これも『日本医事新報』に四十六年十二月四日号から翌四十七年二月十二日号まで、六回にわたって連載した。

その間日本医史学会では「花野井有年と医方正伝」や「太田用成と七科約説」などを発表し、また『日本医史学雑誌』をはじめその他の医学雑誌・郷土史誌等に医史の短文を発表した。

昭和四十六年ごろ、清水の戸田書店社長より静岡県の医史をまとめて一冊の本にして発刊したらどうか、戸田書店が発行者になろう、と相談をもちかけられた。私もその気になって、いままで発表したものに筆を加え、さらに未発表のものや、故人の資料を整理したりした。内容は医家の伝記ものが多くなったので、題名も『静岡県の医史と医家伝』とし、昭和四十八年五月戸田書店より発刊した。年表もつけて五二五頁、B五判。私の最初の著書で、今でもこの本には愛着を持っており、折にふれては開いて参考にしている。もちろん現在では追加訂正しなければならぬ所もあるが…。

戸田寛社長の肝煎で出版後間もなく出版記念会を開いて貰ったが、地元の人達が集まって祝ってくれ、少なからず医史に興味を示してくれたのはうれしかった。また出版後間もなく日本医史学会例会で肥田春安について発表した際、終ってから小川理事長はじめ数名の方が出版祝賀会を開いてくれた。

肥田春安は伊豆の江川坦庵の侍医で、県下で最初に牛痘種痘を実施した人であるが、その伝が全く知られていない。私

は春安の事を調べるために伊東市八幡野の肥田家へ何回か通った。調べているうち彼の事は資料不足で依然不明の点が残ったが、その五男である肥田浜五郎の資料が多く、関心は次第に浜五郎の方に移っていた。彼は坦庵の家来となり江川塾の俊秀であったので、江戸に遊学し伊東玄朴や川本幸民らに学び、やがて二期生として神戸海軍伝習所に入り機関を学び、さらに咸臨丸の機関長として渡米、また造船所設置のため工作機械類の買付にフランス、オランダに渡航、明治五年には岩倉使節団の理事官として随従、のち海軍機関総監、御料局長官等となったが、明治二十二年東海道線藤枝駅で汽車の事故で死亡した。その波瀾に富んだ生涯がたまらなく興味があり、昭和五十年四月『肥田浜五郎の生涯（近代日本造船事始）』と題して新人物往来社から出版した。その著書の中に春安をはじめ兄弟で医師になった者達のこともかなり詳しく書いておいた。

同年静岡新聞社より『ふるさと百話』が逐次出版され、その第十三巻に拙稿「静岡県の医史」を掲載。また五十三年には同社で『静岡県大百科辞典』を刊行したが、その医療関係の歴史に関する部分を担当執筆した。

なお昭和五十年より二年間ばかりは静岡県の医療衛生史の集大成を計画し、明治初年から昭和五十年までを対象として病院や衛生関係の施設等から資料を提供してもらい、その他の文献資料は自分で集めて、五十三年七月『静岡県医療衛生史』を静岡市の吉見書店より発刊した。B五判、七六七頁、写真も多くとり入れ、巻末に年表と索引をつけた。これはどちらかというと専門書の部類で医療衛生関係者や郷土史家に読んでもらうことを目標にした。

この間日本医史学会総会で二回、同関西支部で一回講演し、『日本医史学雑誌』に論文を二回寄稿した。また『清水市医師会史』、『静岡県医師会二十年史』に分担執筆した。

昭和五十三年四月推されて県医師会理事に就任した。この年の十一月安井県医師会長と小川日本医史学会理事長の口添えもあって、日本医師会最高優功章を受賞した。授賞の理由は医史学の調査研究であった。また五十五年三月には、医史

に関する著書で医療衛生上裨益する所があったという理由で、日本赤十字社から銀色有功賞を授与された。

もとより受賞は私の目的ではない。医史の調査研究が面白く、何かヒントを得るか新資料等を見たり聞いたりすると、それが医史に関する限り興味を持ち、ぐんぐんと深入りしてしまうのである。

県医師会の理事をつとめている間に、歴代の医師会長小伝を書いてみようと思い立ち、医師会所蔵の文献・資料をはじめ、各会長の遺族を訪問してその人柄や家庭での生活、残存資料等を見せていただき、順次初代から九代までの会長小伝を書き、『静岡県医師会報』（月二回発行）に五十四年十二月一日号より五十六年十月一日号まで連載した。

五十年代の半ばに、偶然のことから吉原町（現富士市）にあった保全病院とその延長である富士病院の資料が手に入り、変遷のはげしい病院の経営や、時代とともに医師の医療に対する考え方の違いなどを浮き彫りにして、『風雪八十年—ある病院の記録』と題して、明治十一年から昭和二十四年ごろまでの事実を五十三年三月新人物往来社から出版した。一般向けに明治・大正・昭和初期の医療史が理解できるように、半ば解説書風に、半ば小説風（と自分では思っているが）にまとめてみた。友人達はよく調べたものだと感心していたが、私は医史学から得た知識を基本にしたつもりである。富士市ではかなり反響があったようで、その後同市の郷土史研究会から講演をたのまれたりした。

五十九年三月で県医師会の理事を辞任したが、在任中の五十四年に静岡県医史学懇話会の創設を提案した。そして県医師会の分科会の一つに承認されて、毎年助成金を受けることになった。同年五月創立総会を開き、会長に中川長一先生を推した。会員五〇名。五十九年より私が会長に、舟木茂夫先生が副会長になった。この会は毎年一回総会開催時に研究発表を行なっているが、毎回私と舟木先生が発表し、金沢から静岡に来られた津田進三先生も積極的に協力し、研究発表を行なっている。また六十年より年一回会誌も発行している。この会は特別大きくもならないが、つぶれることもなく地味

な活動をつづけ、秋には県下の各郡市地域を対象に順次医史跡探訪を行なっている。将来は会員の共同研究が夢である。

その後も私は相変らず新聞、雑誌等に医史に関する雑文を書き、頼まれて講演なども行なっているが、いずれも調査研究といえる程のものではない。

昨平成元年『日本医史学雑誌（三五巻一号）』の研究ノートの項に「明治初期遠州における間歇熱」を発表、同三月の例会で「明治初期静岡解剖の状況」を講演発表、また『地方史静岡第十七巻』（平成元年）に「静岡県の明治初期の病院の推移と考察」を発表したが、これは一応調査研究の結果の論文といえる。

私は旅行が好きで、ほとんど国内の目ぼしい所は見て廻った。昭和五十年代・六十年代はほぼ年一回位の割合で、多くは五月の連休の頃を利用して外国旅行をした。すべて一般向のツアーに参加しての旅行のため、近くを通りながら見学できなかった所がかなりあった。例えば西ドイツのヴュルツブルクの南を通りながら、シーボルトの胸像や大学を見れなかったこと、オランダにも行っていない事などは心残りである。しかしパリでは三度目でモンパルナスの墓地に埋葬されている林紀の墓に詣る事ができて写真を何枚もとってきた事などは幸運だった。林紀の墓については大滝紀雄先生が『日本医事新報』に、高橋邦太郎先生が蘭研の研究報告に発表されているが、いずれも写真撮影を断られたそうだが、私の場合は許可されて撮影する事ができた。林紀は明治二年静岡県で最初の駿府病院の病院頭になった人であり、パリへ行ったらぜひ墓にお詣りしたいと前から思っていたので念願がかなって大変うれしかった。

その他プラハでペスト撲滅の記念碑を見たり、東ドイツでは森鷗外が学んだライプチッヒ大学を見たり、数えてみるとかなり医史学的な史跡を廻っている。

以上のべたように医史学と私との関係は終始静岡県という地方医史に限られ、いわば土着の地方医史が調査研究の対象

であった。これは環境がそうさせたといえるが、地方医史を調査発掘することはそれなりに有用であると私は思っている。

そんな訳で医史とともに私の関心は郷土史一般にもあり、最近有志とともに清水郷土史研究会を創設し、その会長に推された。

翻ってみると、私も七十一才になり、自分ではあまり意識していないが、既に老人の部類に入っている。しかし医院の後継者がいないので、このまま医業を辞める訳にいかない。これからは序々に診療時間を短縮し、数年後には平日午前のみ診療、さらに機を見て全廃したいと計画している。幸いいまは健康にも恵まれているので、廃業後も医史学や郷土史の調査研究に余生を打ち込みたいと考えている。

（静岡県清水市）